慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宋元刊南北史•七史および隋書について(上)
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.193- 220
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋元刊南北史・七史および隋書について（上）

尾崎　康

北宋代の正史の刊刻は、淳化五年（九九四）の史記・前後漢書に始り、咸平中（九九八～一〇〇三）の三国志・晋書・（旧）唐書を経て、天聖二年（一〇二四）から南北史・隋書に、さらに嘉祐六年（一〇六一）以後になって南北朝の七史に及んだ。

南北史・隋書については、程俱の麟台故事 巻二 校讎に、

天聖二年六月、詔右正言直史官張観・太常博士集賢校理王質・晁宗慤・秘閣校理陳詁・光禄寺丞集賢校理李淑・館閣校勘彭乗・国子監直講公孫覚、校勘南北史・隋書、及令左司郎中知制誥宋綬・吏部員外郎龍図閣待制劉燁、提挙之。

とある。宋会要（輯稿第五五冊 崇儒 勘書）は官職をやや略すが、これに続けて、

綬等請 就崇文内院校勘、成復徙外館。又奏 国子監直講黄鑑、預其事。隋書有詔、刻版内出板様、示之。三年十月、版成。四年十二月、南北史校畢、以献。各賜器幣有差。南北史、大中祥符中、秘閣校理劉筠常請刻版、未成。

というから、大中祥符中（一〇〇八～一六）には南北史はまだ刊行するには至らず、玉海巻四三 淳化校三史 嘉祐校七史の条に、

天聖二年六月辛酉、校南北史・隋書。四年十二月畢。景祐元年四月丙辰、命宋祁等覆校南北史。

とあるように、なお本文を再校する必要があった。景祐元年（一〇三四）以後、南北史の版が成った記事はなく、南史の南宋初期の刊本が現存する以前には正確には遡れないが、校正のより困難な七史が、しかも魏書や北斉書の一部に北史をそのまま移録して、次に述べるように嘉祐七年末には鏤版頒行されているから、南北史はそれに先立ち、この覆校を経てから嘉祐初年の間、つまり一一世紀前半いっぱいまでには印行されていたものと推定される。

一方、七史については、宋会要や麟台故事に記事がないが、玉海の 嘉祐校七史 に、前後するが、

嘉祐六年八月、校梁陳等書、鏤板。七年冬始集、八年七月、陳書始校定。

嘉祐六年八月庚申、詔三館秘閣、校理宋斉梁陳後魏周北斉七史。書有不全者、訪求之。

の二項があり、景徳羣書漆板 刊正四経 の条に、

嘉祐七年十二月、詔 以七史板本四百六十四巻、送国子監、鏤板頒行。

とある。七史の巻数は誤りで、計四六五巻になるとの指摘もあるが（潘美月 南宋重刊九行本七史考 故宮図書季刊四―一 一九七三）、さらに南斉書の巻末に、

崇文院

嘉祐六年八月十一日

勅節文宋書斉書梁書陳書後魏書北斉書後周書見今国子監竝未有印本宜令三館秘閣見編校書籍官員精加校勘同与管勾使臣選択楷書如法書写板様依唐書例逐施封送杭州開板

治平二年六月　日

（百衲本に影印の〔南宋前期〕刊本による。この葉は〔南宋中期〕修）

との牒文がある。すなわち嘉祐六年（一〇六一）の勅で七史の校訂に着手し、梁書、とくに陳書のように巻数も少くて本文も無難であったものはすぐに完了し、南斉書も治平二年（一〇六五）には開雕されることになったが、北朝各史の一部には、南宋刊本（百衲本）以後のすべての版本に明らかなように、当時すでに原文が失われてしまっていた巻さえ少くなかったから、全国にテキストを探訪したり、北史や高氏小史などを参照したりして、校訂に苦慮したのであった。一度は嘉祐七年一二月には校正を終え、国子監に送って版刻することになったが、まだまだ誤りが多いために校定の作業を継続し、七史が完成したのはさらに半世紀後、北宋も末期の政和中（一一一一～一一七）に至ったという。晁公武の郡斎読書志巻五（袁本巻二上）の宋書の条に、これらを纏めて次のように伝える。

嘉祐中、以宋 斉 梁 陳 魏 北斉 周書 舛繆亡欠、始命館閣職讎校。曾鞏等以秘閣所蔵多誤、不足憑以是正、請詔天下蔵書之家、悉上異本。久之始集。治平中、鞏 校定南斉 梁 陳 三書 上之。劉恕等上後魏書、王安国上周書。政和中 始皆畢、頒之学官。民間伝者尚少。

これをもって、史記から唐書に至る十五史の印刷がようやく成ったわけであるが、淳化五年に校三史の詔勅が出てから、実に一世紀余を経ている。初期の刊刻事業、すなわち写本の伝本を集め、はじめて定本の刊本を作るという仕事がいかに難儀なものであったか、また宋朝が校訂に厳格を期したかが窺える。

なお、五代史記は治平二年から七年後に（熙寧五年八月）、欧陽修の遺族から収められ、さらに国子監に送られて印行されることになる（玉海巻四六所引中興書目・郡斎読書志巻五）。玉海の七史の条の末に「唯開宝所修五代史未布以俟筆削」と付記されているのは、むろん旧五代史である。なお、旧唐書については資料が乏しいけれども、南宋前期に両浙東路茶塩司で一五行本が刊刻され、その残本六九巻が北京図書館に伝存し、百

衲本二十四史に影印されたが、新唐書などと同じく、北宋刊本の覆刻と推定される。したがって、七史が出揃った政和ころには、十七史がはじめて開封の国子監に完備されていたものと思われる。

以上のように、南北史は嘉祐初年（一〇五六）までに、七史は治平二年（一〇六四）から北宋もすでに後期になるが政和中（～一一一七）までの間に、いずれも刊刻されるに至った。しかし、これら北宋刊本の現存するものは、まして七史は直斎書録解題に民間に伝わるものは少いというだけに、まったくない。

その中でもっとも早いものに、ごく零巻ながら南史の南宋前期刊本がある。北史にはその期のものが残らず、七史は南宋前期刊本が完存するが、宋印本はなく、元・明初印本も零巻で、修補を受けつつ明の南京国子監に伝えられ、嘉靖年間にそれぞれ南監二十一史の各一として印行された、いわゆる三朝本である。

南北史は、南宋中期の建安の、おそらく黄善夫刊史記以下の十史を構成するであろう一〇行本がある。十史とは十七史から七史を除いたものであるから、南北朝の七史は省かれたらしい。元大徳九路儒学刊の正史も十史で、南北史は隋書とともに元本が南監二十一史に用いられたから明嘉靖に至る修本の完本が珍しくなく、さらにそれより早い至明初修本が原刻葉を多数残す善本として、全巻には及ばないが百衲本の底本とされている。

一　南　史

南宋前期刊本

南史の南宋前期刊本は金沢文庫旧蔵本であるが、全八〇巻のうち左の五巻余が現存するにすぎない。

〔目録〕巻二三～二六（列伝一三～一六）　五冊　（傅増湘旧蔵）　北京図書館蔵

巻四六（列伝三六）第一・三・四葉　（内藤湖南旧蔵）　杏雨書屋蔵

巻四八（列伝三八）　一冊　金沢文庫蔵

第一は、雙鑑楼善本書目に「南史五巻　宋刊大字本九行十八字存目録一巻列伝十三至十六有金沢文庫墨印」と著録されていたもので、いま北京図書館善本書目の「宋刻本　五冊　存四巻二十三至二十六」であると思われる。四巻で五冊というのは、目録も存するからであろう。金沢文庫図録（一九三五年　幽学社）にも「目録一巻一冊　傅増湘氏蔵　／列伝巻十三至十六の四冊　同」と記され、巻二五（伝一五）首半葉の書影が掲載されていて、金沢文庫印も鮮明である（図版三二）。また巻二三の首半葉も長沢規矩也編　図解和漢印刷史（一九七六年　汲古書院）に影印されているが、ここには金沢文庫印が見えない。

第二は、金沢文庫図録に内藤乾吉氏蔵として、第一葉の写真が掲げられている。

第三は唯一の金沢文庫現蔵本であるが、次にこれをもってこの版本を解題する。前二者を傅・内藤両氏が入手したのは約半

世紀前であり、金沢文庫図録も、傅・内藤氏蔵は明治・大正のころ庫外に出たものであろうとしている。南史八〇巻は金沢文庫において次第に散佚し、今世紀にはもはやこれら五巻余しか残存していなかったのである。なお、これがさらに二世紀以上も遡るであることを、後に一言する。

この金沢文庫現蔵本は、ごく近年の茶色表紙（二八・五×二〇・七ｾﾝﾁ）に覆われ、粘葉装に改装され、裏打補修を施されている。首題は「列伝第三十八（隔二格）南史四十八」、陸澄以下、江左の名門呉郡陸氏一族の列伝でその目に二行をとり、第四行から本文が始る。左右双辺（二一・二×一五・五ｾﾝﾁ）、毎半葉九行、毎行一八字、版心は白口で、単魚尾、「南史列伝三十八」、丁付・刻工名が彫られる。刻工名は、張定　姜仲　彦文　李忠（李忠か）張昌　方通　棠、避諱欠筆は　玄　朗　敬　警　弘　殷　意　鏡　恒　徵　署　譲　煦　完　と北宋末に及ぶが、南宋初の皇帝については　構　慎　などの該当する文字があらわれない。巻四六首の書影に桓驚の二字の欠筆がみえるほか、北京所在の巻二三～二六の四巻には、構溝媾慎の文字が含まれるから、これらを検することによって刊年が多少限定されるかも知れない。全二三葉で、尾題も「列伝第三十八（隔三格）南史四十八」。尾題の次行に「金沢文庫」の大型単郭の墨印が捺されているが、関靖氏はこれを一―一号印と分類されている（金沢文庫の研究　一九五一　講談社）。なお氏によると、傅増湘蔵の四巻のものはこれと二―二号重郭肉太印であるとされ、金沢文庫図録では、その位置が第一号印は第一三（巻二三）の首、後者が第四号印と称されて第一五（巻二五）の首であるとされる。ただし、図録の巻二五首の書影にみえるのは現金沢文庫蔵の巻四八尾のものと同印のようであるから、両印の巻が逆に取りちがえられたのかも知れない。

関氏はさらに次のような記録を収録されている。

延宝五年（一六七七）冬、加賀の前田綱紀（松雲）が津田太郎兵衛光吉を遣して金沢称名寺本を調査し、その珍籍を借出すについて「称名寺書物之覚」というものを作らせたが、その板本の項に「南史列伝　二百枚程」とある（付録第二）。いま文庫蔵の巻四八は全二三葉であるが、目録と五巻とで、一巻あたりの平均は三三葉となり、またこの巻四八とその他の現存巻を百衲本（元大徳広徳路儒学刊本）の葉数との対比によって換算すると、現存宋刊本は計約一八八葉となり、当時せいぜい残っていてもう一巻があったか、ということになる。

ついで、享保三年（一七一八）六月に、西大寺江戸出張所金剛院を通じての幕命に応じて、享保公用録を作成したが（西大寺蔵）、その書籍目録には「南史列伝　一結」と記されているという（同書三九八頁）。別に冊数を明記する書があるから、南史の場合はやはり一束の意であって、これが目録および五巻余の二〇〇葉程の装訂が崩れてそうなっていたのか、巻三六のような断簡数葉を指すのかわからない。しかし、すでに延宝・享保のころから、南史が現存本の程度の列伝の一部しか残っていなかったことが明らかである。

南宋刊本南史の本文は、金沢文庫に現存の巻四八に限っていえば、元大徳信州路儒学本、明南・北国子監本、汲古閣本とさほど変らない。南史は元西湖書院重整書目に著録されず、この南宋本と元本との関係は定かでないが、後に詳述するように、元本は嘉靖中にも補刻されながら南監に伝えられて印行され、万暦一八年に新雕の南監本に代えられたのである。また、北監本・汲古閣本は南監本に基いている。したがって、元本と主な明本とは直接に繋っていて、その本文に大差がないのは当然である。

そのために、中華書局の校点本（一九七五年）は百衲本の元本を底本とし、明本や清の武英殿本、金陵書局本を参照している（出版説明　四）。元本に信州路儒学刊とは別の一本があり、百衲本は巻四八についても一巻のうちに両者を混ぜているが、これについては元本の項に述べる。また、北京図書館所蔵の宋本残巻も「査対」したというから、巻二三～二六についてはこの南宋本も対校したらしくもみえるが、これはもう一つの存四九巻の宋刊本、すなわち南宋中期建刊本の方のようである。そして、校点本は七史のうち南朝諸史や通鑑・通典・通考等の諸書を参照し、詳しい校勘記を付けている。そこで、いまは校点本を中心として、南宋本巻四八の本文を他本と比較してみる。

校点本はこの巻に一七条の校勘記を掲げているが、いずれも南斉書等の諸書をもって南史各本の誤りを訂すものである。その内訳は、重複するものもあるが、南斉書六、梁書四、陳書四、通志三、それに王懋竑の読書記疑と王鳴盛の十七史商榷による。

この中に、南宋本だけが正しいものが二例ある。校勘記の〔六〕〔七〕に取りあげられているもので（一二〇六頁）、そのまま掲げると、

〔六〕　吏曹都令史歴政来諮執選事　「都」各本作「郎」、拠南斉書改。

〔七〕　繕字士繻　「繻」各本作「儒」、拠陳書改。

である。たしかに元本以下は「郎」、「儒」であるが、南宋本には南斉書、陳書と同じく「都」、「繻」とある。

残る一五は南宋本も元本以下と同じく、誤字、誤脱、衍文とされるものであるが、うち二例は唐の高祖李淵の避諱で、南史が唐初に編纂されたためである。

なお校勘記に断らないが、陸倕の子纘（校点本一一九三頁）の名を、南宋本以下の各本にはすべて「瓚」とあるのに、校点本は梁書巻二七の方を採って「纘」としたらしい。その弟が緬であり、従兄弟が〔七〕の場合がそうで「繻・繕」であるから、糸偏が正しいのであろう。新唐書宰相世系表（巻七三下）には、家系がわずかに外れてみえない。

以上の他にも南宋本には多少の誤字や同義異字はあるが、ほとんど問題にするに足らない。むろんそれは元本以下にもあり、南監本は少いながらやや増え、その一部が北監本、汲古閣本は継承されている。

校点本はやはり北京図書館蔵のこの本の巻二三～二六は対校していないらしく、この四巻の校勘記にはとくにその結果を示す記事はみえない。むしろ、同館蔵の南宋中期建刊本の残巻の

巻七三の校勘記に「宋本」が用いられている。巻二五の校勘記の〔八〕に、

方古信為傳　「方古」元大徳本作「万古」、其他各本作「萬古」。按「萬古」一詞用之於此不合。蓋「方」誤為「万」、「万」又易為「萬」。今拠冊府元亀八八二改正。

という一条があるが、この南宋前期刊本をも参照していれば、ここに、その文字が提示されてよいはずである。なお、金沢文庫図録所掲の旧傅・内藤両氏所蔵本の書影にみえる部分については、各巻とも元本等とまったく異るところがない。

この本は九行一八字の大字本で、後述の七史と行格を同じくし、字様もかなり似て、版心の形式などやや異るところもあるが、わずかに七史より早いかと思わせるものの、ほぼ同じころの刊であり、おそらく一連の国子監での北宋本の覆刻かと推測される。そうであれば北史も同様に刊行されたはずであるが、いま伝存するものはない。

元大徳一〇年広徳路儒学刊本

元大徳九路儒学本の南史がどこの路の担当によって刊刻されたかは、版心等にほとんど記載がないためにわかりにくく、台北の中央図書館の善本書目および宋元本図録などは信州路としていたが、神田喜一郎氏が広徳路説を唱えられた（元大徳九路本十七史考　史林二五―三　一九四〇　東洋学文献叢説　所収　一玄社　一九六九）。前者の根拠は不明であるが、北史が信州路であること、もう一本を同書目は明初覆元大徳間信州路儒学刊本と称するが、これも非常に似た本が北史にあることから、南北史を同所の刊とみたらしい。神田説は、序文の記事などにみえる桐川の名を宋末の新編方輿勝覧の広徳軍の中に見出して、これを広徳路と考えられたものである。

このことには後に触れるが、大徳九路儒学刊の実は十史のうち、漢書・後漢書・三国志・唐書とともに、南史にも序文がほぼ存する。現存本の大半は、明の南京国子監に伝えられて嘉靖年間に印行されたものであるが、ほとんどその巻頭に、版心に「南史序」と題する三葉がある。これにはいずれも第三葉が欠けていて、明代にはその版木が失われていたらしいが、傅増湘が永楽大典巻一〇一三五にその全文を発見し、百衲本などではこれをもって補っている。文は昏乱短命の南朝について過半を費し、欠葉の後半になって、各道の儒学が十七史を分刊し、桐川に南史が割りあてられたとし、主な関係者として郡侯呂師皐と郡同知張雲翼の名を挙げ、蜀人蒯東寅と自署して「大徳丙午（一〇年）立夏拝手謹書」と結ぶ。

この元刊本でわが国に現存するものは、すべて明の嘉靖一〇年前後修補の南監本であるが、まずこれについて述べる。

八〇巻	（巻二五第二一・二三葉　補配明初覆刻本）	二〇冊	静嘉堂文庫
〃	（明平泉鄭氏　寛永寺勧学寮旧蔵二十一史）	二〇冊	内閣文庫
〃	（万暦印　林家旧蔵二十一史）	二〇冊	〃
〃	（嘉靖末隆慶間印二十一史）	二三冊	宮内庁書陵部
〃	（万暦一〇年代印二十一史）	二〇冊	蓬左文庫
〃	（巻一～三・一一～一四補写）	二三冊	東洋文庫
〃	（傅増湘旧蔵）	二〇冊	都立中央図書館

明初ごろの修葉があり、さらに版心上象鼻に嘉靖九年、同一〇年補刊の文字の入った葉がかなりある。巻一第一葉からしてそうであるが（左右双辺、二一・九×一五・七センチ）、四周双辺の原刻葉の残存も少くなく、その刻工名として、古杭占閏　占閏　占　岂　楊　進　千　皿　中　玉山　張珍　陳　章洪　などがある。すべてが白口、線黒口であるのに巻六の刻工張清之の二葉が粗黒口であるが、これは少くとも嘉靖修には降らず、弘治ごろの補刻葉であろうか。

前稿の「明南北国子監二十一史について」（斯道文庫論集第一八輯）に述べておいたが、九路儒学本の十史の版木は、元至正四年（一三四四）の金陵新志以前に集慶路儒学に集められ、明の南京国子監に受継がれて、嘉靖七年から一〇年にかけては、宋元明初刊本各種と合わせられて二十一史を整え、全面的に補修されて印行された。これから万暦年間にかけて刷られたのがこれらの本で、南史の版木は万暦一七～一九年に改雕されるまで用いられたのである。現在までほぼ二十一史の形で伝えられているものは、たびかさなる補修の年代などからおよその印行の時期が推定できるので、右の所在表にもそれを記入しておいた。

台湾の中央図書館の善本書目には、元刊南史に関して、

1　八〇巻四〇冊　信州路儒学刊本
2　八〇巻二六冊　同　明南監修補本
3　八〇巻二〇冊　同　同
4　存七八巻一九冊　同　明代修補本　欠首二巻
5　存二六巻一〇冊　同　存紀四～七・伝一～五・二八～三〇・三四～四四・五八～六〇　北平
6　存一七巻　七冊　同　存紀二・三・六・七・伝六～一〇・一二・一三・三四～三六・五五～五七　北平
7　存四四巻　六冊　明初覆刊信州路儒学本　存紀一～一〇・伝一～八・二七～三六・五五～七〇　北平
8　存三二巻　八冊　同　存伝二四～二七・三二～五六・六一～六三　北平

の八本が著録される。信州路儒学刊というのが即断であることは前述したが、原刻本（1 5 6）・明修本（2 3 4）・覆刊本（7 8）の三種があるわけである。このうち 1～4 については、同館の金元本図録（図五六）と阿部隆一氏の中国訪書志（斯道文庫論集一三輯　単行本　C　七九　七九）に解題され、2～4 は同じく至嘉靖一〇年修本とされている。

そして、1 の原刻本であるが、両解題、とくに後者に基いて述べればほぼ次の通りである。

八〇巻　元大徳一〇年〔広徳路儒学〕刊　〔明中期〕印　四〇冊

後補淡鶯色絹表紙（三三×二〇・三センチ）、襯装。首に南史目録はあるが、大徳丙午の蒯東寅の刊書跋は欠。巻一首半葉は図録に書影が掲げられ、後修本が嘉靖一〇年の修葉であるのに、これは明らかに原刻葉と見えて、上象鼻に「四百八」の字数が、下象鼻に「東」の刻工名がある。首題は「宋本紀上第一（隔八格）南史一」、次行（低一二格）「李（隔三格）延寿」、匡格は四周双辺（二一・八×一五・四センチ）、毎半葉有界一〇行、行二二字。版心は白口、三魚尾の間に「南史帝紀（列伝）幾」の題と丁付、その上下

にときに字数と刻工名を記す。刻工には、

古杭占閏　占閏　占　古杭良卿　良　卿　何甫　何　甫　玉山
子后　朱敬之　朱苟　徐進卿　徐　進　僧玘　僧　玘　張珍
張后　張伯上　張　楊　木易　木　易　陳刁　陳　可　于　東
虞　黄翁　中　入　弓　伊　其　范　洪　引　允　鄭　茂
共　皿　王　公　董　章　方　芦　余

などがいる。巻八〇末葉の下象鼻に、「桐学儒生趙良奚謹書／自起手至擱筆凡十月」の二行がある。(1)

一部の紙背が正徳一五年（一五二〇）の公牘紙であるというから、これは嘉靖九年のわずか一〇年前であり、その大補修を受ける直前の印本ということになる。明の南監では弘治・正徳中に補修を行っていた例があるが、この本にはそれがない原刻本であるとされる。しかし、刻工張清之などの葉は北史に照しても明初の補刻かと考えられ、また北京図書館本に嘉靖元年修とあり、北史には同元年、二年の修が実在するが、この本も公牘紙の年代から言って同年以前の印本とは考えられないから、原刻本ではありえない。(2) 補写葉が往々あるというが、これが嘉靖修本でその補修葉に代っているとすれば、当時、版木が失われたままであったことになる。

蔵印は、「史鑑／之章」（陰）「西史／邨人」（陰）「子孫／保之」（明史鑑）、「果親王府／図書記」（清果恭親王）、「孫／伯淵」（陰）「自得／居士」（陰）「繡衣／執法□／□印」（陰）、「張印／釣衡」「石銘／収蔵」「石銘／秘笈」「択是居」（裏印）「呉興張氏適園収蔵図書」「逆圃／収蔵」（清張釣衡）。

ここに嘉靖修本との相違がいくつかある。

第一は、巻頭に大徳一〇年の序跋を欠くことである。涵芬楼旧蔵・北京図書館現蔵の八〇巻三二冊は、涵芬楼燼余書録によれば、嘉靖初年の補版があるというが、同九・一〇年の補刻の年記に触れないから、やはりその補修の直前と思われるが、この本にもそれがない。ただ二本だけであるから、たまたま脱落したものでもありうるが、一方、嘉靖修本の大半はそれを備える。ただし、嘉靖当時から第三葉を欠いて、他葉と同じ半葉五行の冒頭に「闕」と刻した野紙を挿入しているが、これと第一・二葉はおそらく嘉靖の補刻で、第四葉があるいは原刻かと見える。永楽大典に全文が発見されて、百衲本は第三葉の部分を補写して影印しているが、他の三葉も同筆で鈔写したものを掲載しているから、これをもって嘉靖修本の序跋の字様と見てはならない。

刻工は、さすがに原刻本ということで、嘉靖修本よりはるかに多い。それは後に修葉に代ったのも当然であるが、引続いて本文は原刻葉のままで、字数とともに刻工名が削られた場合も少くない。嘉靖修本には巻四一第一八葉の「古杭良卿刊」の五字がないし、巻末最末葉の下象鼻の版下鈔手名の二行も失われている。

中央図書館善本書目の　5　6　の二本も、北平図書館善本書目（一九三三序刊）にも元刻本とあり、原刻本、少くとも嘉靖修本以前の印本と見て誤りないと思われる。(3) 旧京書影に、(242) 列伝二九之一、(243) 列伝三〇之一四（末葉）の二葉を掲げる

が、これは 5 の存二六巻の一部らしく、その提要に「有広智退隠墨記」というものも前者の欄外に見える。これは墨印らしく、その下方に「観書以進徳也縞／書虧徳幸勿為之」の二行も見え、やはり北平本の大徳刊の隋書などにもあるが、これと書影の版心の字数などから、ほぼ原刻本でよかろう。なお、嘉靖修本のこの両葉は、前者が補刊年記はないが嘉靖修葉、後者が原刻葉だが版心の字数を削り、本文の幾字かに埋木して補刻した跡があるから、逆に旧京書影所掲の本が原刻本であることがわかる。

中央図書館本の 7 8 は、信州路との表記はともかく、右の元刊本の明初の覆刻であろうことは確かで、北平図書館善本書目も明刻本としている。この本はわが国では静嘉堂本の補配二葉のほかに見かけないが、百衲本の過半に用いられているので、次の項で扱う。

北京図書館善本書目には、元刊本としては完本二部が著録され、一が明修三二冊、他が嘉靖元年重修（巻七五・七六配明周雲治抄本）一二冊である。

前者がすでにやや触れた涵芬楼旧蔵本で、その燼余書録に、序跋がないこと、板心下方に古杭良卿刊の五字と桐学儒生趙良粲等の二行があること、嘉靖初年の補版があること、をいうのである。北史にも嘉靖元年の補刻がかなりと、二年のものが少々あるから、これは肯ける。古杭および桐学の考証と本文の校勘についても相当の字数を費しているが、これに関しては次に取りあげる。

もう一本には嘉靖元年の補刊年記があるらしい。燼余書録の記述にもうひとつものたりないところがあるが、これは右の嘉靖初年補版というのと同じものであろう。中央図書館本には明修がないというから、まして嘉靖元年の補刻年記は見当らなかったのであろうが、紙背の正徳一五年の公牘紙が二年の間に廃棄されてこの用紙に充てられることはなかろうから、中央本も嘉靖元年以後の印行なのであるが、これらの関係が定かにならない。さらに嘉靖修本（九・一〇年）は原刻葉を相当数も残しながら、そこには同元年の補刻年記が早くも削去されてしまっている。

一方、燼余書録に巻中ときに残葉を見るとあるが、次に述べることであるが、百衲本の一部にこの涵芬楼本が用いられている内に、版心の小黒口よりも粗黒口というべき異版が数葉づつ混るのがこの残葉の部分のようである。嘉靖修本ではこのところがすべて嘉靖の修葉であるから、その直前には欠葉であったものを、別本をもって補ったのに相違ない。ところがこの粗黒口葉は、後述するように北史の実例に見れば、覆刻本の補刻葉であるが、百衲本に用いられた覆刻本は 7 の四四巻六冊と思われるものの、この本のものでないことは明らかであり、かつ 8 の三二巻八冊でもないらしく、出所が推定できない。

ともかく百衲本南史は「上海涵芬楼影印北京図書館及自蔵元大徳刻本」というから、以上に述べた中央図書館の北平本の一

と北京図書館の涵芬楼本を底本としたことである。

まず、南史序（刊書跋）はこれら各本にはなかったもので、おそらく嘉靖修本を参照して行格を同じくし、永楽大典から第三葉の九七字を補って、新たに全四葉と楷書で鈔写したものを挿む。第三葉の右郭外には、「是葉原欠依永楽大典巻之一万一百三十五写補」と記してある。

そして、南史目録全二六葉、続いて巻一全三〇葉が大徳九路儒学本と異る。しかし行格は等しく、かつ字様もやや似せた、おそらくはその覆刻本である。以下、全八〇巻に目録を入れて八一と数えるうち、この本を全葉に用いたと思われるのが二四巻、一巻の大半から過半に及ぶのが二〇巻ある。逆に、全原刻葉がわずかに二巻、多くが原刻であるが右に不明と述べた粗黒口の別本を数葉づつ含むのが二三巻、これに準ずるがこの覆刻本もわずかに含むのが八巻、その他、という具合である。過半は覆刻本に拠っていることが明らかで、百納本の張元済の跋にも北京図書館の残本を借りたとするが、なお元大徳本と称している。そして、各巻ごとに原刻および覆刻葉の分布をみると、まず 7 の存四四巻六冊の覆刻本を基準として、この本の存するところはこれを使用し、その欠けるところを涵芬楼本の原刻葉その他で補ったというのが一般的である。

ただし、原刻葉に古杭占閏・古杭良卿らの刻工や巻尾の版下書きの名前などがみえる特殊な場合は、便宜これをもって覆刻葉と差しかえたらしい。それも影印に際して鮮明を慮って漫漶のところにかなり加筆を行ったようで、たとえば後者の句の「擱筆」が、中央図書館図録・中国訪書志の記述と異って「閣筆」となっている。

涵芬楼本は全巻を備え、嘉靖九・一〇年の大修補の以前の印本であるが、それだけに百納本跋にもいうように「多漫漶不可読」の難があった。そしてそれ以上に、粗黒口葉のところが多分そうであるように、欠葉が少くないための措置ではあったのであろう。しかし、百納本には珍しくないことであるが、全巻については無論のこと、一巻のうちにさえ数本を断らずに混え、かつ底本を定かにしない別本を挿入するなど、一貫性を欠くことはテキストとして疑問を抱かせる編纂の方法である。

さて、この南史の刊地の問題である。

広徳路儒学説については、張元済（百納本南史跋・校史随筆・涵芬楼燼余書録）、神田喜一郎（元大徳九路本十七史考）、阿部隆一（中国訪書志）の三氏によって詳述されているが、これらを総合、要約すると次のごとくである。

冒頭の刊書序の現在は欠葉の部分に「桐川偶得南史」とあり、末尾の版下書の識語に「桐学儒生趙良」とあった。張氏は明一統志によって、広徳州の桐水、広信府の桐木水、貴溪県の桐源書院と、江東建康道管内に桐川と桐学を探し求めたが特定できず、むしろ刻工名の一部に冠する古杭の名から浙江の桐廬県学と解して杭州刊本かとし、杭州刻・広徳路刊として刊地と雕板地とは必ずしも一致しないでよいという阿部氏の批判を受けている。

これに対し神田氏はまず、静嘉堂現蔵の南宋淳熙丙申刊・同辛丑修の史記の序跋に、桐川郡守の張杆と耿秉によって郡斎に おいてそれが行われたとあることに着目し、銭大昕の十駕斎養新録巻一三の史記宋元本の条に、これを広徳路郡斎としてあることを指摘された。そしてさらに、宋末嘉熙中刊の新編方輿勝覧巻一八の江東路広徳軍の条に、郡名として桐川があり、その下に「広徳県西南有桐水、故名」と注されていることを明らかにされ、「南史が広徳路の刊刻であることは殆ど疑ふ余地が無い」とほぼ断定された。

ただ、桐川郡は雅名であって実在しなかったから、宋代の地理書の広徳軍広徳県の条、たとえば太平寰宇記巻一〇三、元豊九域志巻六、輿地広記巻二四、輿地紀勝巻二四などには、桐水については必ず触れられているが、桐川郡の名は記載されないし、大元一統志の輯本にもみえない。また、近世の広徳州志にも（新修広徳州志一〇巻 万暦四〇年序刊 六冊 重修広徳州志六〇巻 光緒七年刊 二〇冊）、その地名についても、その郡斎についても、さらには刊書跋にみえる郡侯呂公師皐・同知張公雲翼についても、該当する記事を見出せなかった。

このような中で神田氏が新編方輿勝覧の桐川郡に注目されたことは卓見というべく、雅名についても一言されていて、南史広徳路刊説は揺るぎないものと考えられる。なお古杭については未明だが、北史のところでも触れる。

明初覆元大徳一〇年広徳路儒学刊本

前掲の 7 8 の百衲本の過半に用いられた覆刻本は、むろん行格は一〇行二二字と元刊本に同じだが、匡郭はその四周双辺に対してほとんど左右双辺であり、字様がだいぶ劣る。版心は似たものが多いが、その下方の刻工名が異るわけである。

この刻工名は左に表示するが、すでに中国訪書志にしばしば指摘されている通り、a北史・b遼史・c金史・d古史・e古今紀要・f慈溪黄氏日抄分類・g唐文粋の元末明初ごろの刊本に同名の者が頻繁に見える。刻工名の下のabcは、この各本に共通する場合の記号である。この七書の刻工名は、次掲の各本から採った。

a北史　残六九巻　二六冊　台北中央図書館（北平）
b遼史　一一六巻　一〇冊　静嘉堂文庫（百衲本も同版）
c金史　百衲本一三五巻中の五八巻
d古史　六〇巻　八冊　台北故宮博物院　中国訪書志B 49
e古今紀要　残七巻四帖　台北故宮博物院　同　A 73
f慈溪黄氏日抄分類残二九巻一九冊　台北中央（北平）　B 149
同　九七巻二四冊　台北中央　C 129
g文粋　一〇〇巻　八冊　内閣文庫
同　二〇冊　台北故宮博物院　A 152

3子中 de fg　子晏 bc fg　子記 f　子高 ac fg　士通 abcd efg
4六彦 abd efg　六晏 abc fg　友永茂 abd fg　双平 efg　5丘老 abc efg　江子名 abd efg
付名仲 abcd efg　付彦成 acd fg　付資 abd efg　6名遠　汝敬 bcd efg
江六 a　江同 acd efg　江后　江貴全
7伯安 a　伯美 abc fg　余長寿 abc efg　呉原礼 ac df　呉福 abc efg

肖寄 abcd efg　志道 abc dfg　8 侍者　周同 a f　周寿 abd fg
孟和 f　孟達　易林　林安 abcd efg 林備　彦和 abc def　彦珍
9 姜原良 a　彦従 b　彦正 abc dfg　范通 bde fg 10 原文
范双平　范彦 e　范彦成　徐彦正　11 張名遠 abc dfg
原礼 abe fg　徐子中 b g　徐林　連彦 ab fg　連彦博 ac
張名　張伯　章毫 ac d　陳彦　陳彦博 a
郭名 b　陳四 b　陳立　媿名 ac fg　媿海 a d
陳魯 abd fg　陸付 a d　12 媿右 ab dg　貴全 abd efg　黄子高 ac dg　黄志道 a
景中 abc efg　景舟 abd efg　黄孟竜 ac dg　黄保 abd fg 13 葉禾 b　葉松 ac dg
黄侍 a　虞子徳 ac fg　虞子璋　虞后 ab ef　虞良
虞子記 abc fg　虞亮 abcd efg　虞孟徳　詹現 acd fg　14 熊仏林 a　15 劉八 ac d
劉本 abd fg　劉伏 abc dfg　劉伯安 df g　劉宗 af g　劉保 abcd efg
劉宣 acd efg　劉貫 acd fg　潘晋 abc dfg　16 薛和尚 acd fg 17 羅六 abc dfg
羅雄 a

これだけ相互に共通するから、いずれもほぼ同時期に同地域で刊刻されたと見るのが妥当であろう。これについて中国訪書志の右の古史の項には、莫伯驥の五十万巻楼蔵書目録初編巻五に、「楊氏所刻留真譜有元刊古史、半葉十四行・行二十四字。楊氏又有明初刊本、曾於題記潘書時及之。伯驥攷 明陸氏中和堂随筆、称 洪武二十三年福建布政使司進南唐書・金史・蘇轍古史、初上命礼部遣使購天下遺書、令書坊刊行、至是三書先成進之。楊氏之本当即此時所刻。」とあることを指摘し、これを支持して洪武年間（一三六八～九八）福州刊としている。陸深（明史二八六・一四七七～一五四四）は弘治一八年（一五〇五）の進士で、中和堂随筆上（百陵学山所収）にこの記事はある。

したがって、この南史も、北史とともに、先ず成った南唐書・金史・古史の三書に次ぐ明初の福建刊本と考えられる。百衲本の粗黒口の葉はこの補刻と思われるが、ほとんど涵芬楼の元刊本の欠葉であるらしいところに挿入されていて、その底本はわからない。7 の存四四巻を用いているところには補刻葉はなく、原刻本のようである。(4) 8 の存三二冊は百衲本にまったく使用されていないらしい。

なお、この南北史の刻工のうち、江子名 汝敬 周寿 范双評 張名遠 の五名は、元の泰定元年（一三二四）西湖書院刊、後至元五年（一三三九）・〔明初〕遞修の文献通考三四八巻（静嘉堂等蔵）の補修も行っている。他にいわゆる眉山七史の補刻など南監系の諸書に、文献通考のかれらも含めた刻工と相互に共通する者も何名かいる。文献通考については原刻および両度の補修の区別がなかなか判定しにくいが、右の陸深の文と古史・金史の刻工が共通することによって、洪武後半から次の建文、永楽初あたりの再修の葉が明らかになるわけである。しかし実際には、元後至元と明洪武では半世紀ほどの年代差があるのに、これら刻工の修葉が版面からはあまりその差異が認められず、どちらとも言いにくいことと、次に触れる元の至順三年（一三三二）建昌路刊南北史との関係で、多少の疑問が残る。つまり、陸深の文を無視すれば、かれらが文献通考の後至元修と至順三年南北史の刻工たりえ、この南北史は建昌路刊となる

からである。

もう一つ、建昌路刊の南北史があったといわれる。神田氏の論攷に全文が紹介されているが、孫毓修 中国雕版源流考 所収の「元瑞州路学刊本隋書欧郷周自周序」の、至順三年（一三三二）に粛政廉訪司が建昌路に南北史の刊刻を命じたというものである。

これは江西湖東道粛政廉訪司が江東建康道より二五年ほど遅れて、再び十史の刊行を企てたもののようで、すでに史記・両漢書・三国志・唐書・五代史の六史が諸路に完成しており、隋書もこの際できたようであるから、龍昌路（龍興路か）の晋書とともに、この年をさほど隔てないで、建昌路で南史・北史も刊刻されたのであろう。前述の粗黒口本は、南北史とも版式が共通しているし、右に述べた文献通考の後至元修との関係もあり、また、大徳本の覆刻本であるらしいことから、この至順建昌路本と関係があるかと思わせないでもないが、陸深の記事と古史・金史の刻工が明らかに合致する以上、洪武二三年までの六〇年余の差は如何とも埋めがたい。いずれにせよ、建昌路本は現存せず、実態がわからない。

二 北 史

南 宋 中 期 建 刊 本

北史には南宋前期の刊本が残存しないが、南宋中期の建刊本が二部、静嘉堂文庫と北京図書館とに存する。黄善夫本史記の系列の、おそらく十史を形成するうちの一と思われる。

残本（存巻二・六～一八・二〇～二九・三一～八〇・九三～九八・一〇〇）計八一巻

〔南宋中期　建安〕刊　八〇冊　静嘉堂文庫蔵

北京本も二七巻存するが、大半の現存の巻次が両者に共通していて、北京本が静嘉堂本の巻一九・三〇の二巻を補うにすぎず、なお巻一・三～五・八一～九二・九九の計一七巻を欠く。

後補金切箔散藍色絹表紙（二六・四×一六・七センチ）、金譲玉装（料紙高さ二四センチ）。巻一は欠巻で、巻二の巻首は「魏本紀第二（隔六格）北史二」と題し、左右双辺（二〇・七×一二・七センチ）、一〇行一八字。版心は線黒口または白口、双魚尾の間に「北已（記・伝）幾」のように題し、下象鼻に丁付を刻するが、字数・刻工名はない。耳格に小題。列伝は各巻首に伝目を立て、さらに本文中に各人の題に一行をとるのは三国志（百衲本所収）と同じく、やや右上りで固い感じの字様、行格とも南宋中期建刊正史にほぼ共通する形式である。尾題は「序伝第八十八（隔五格）北史一百」。避諱欠筆は、玄朗驚弘匡恇恒禎貞徴樹讓桓構慎敦燉廓 等の諸字に行われる。

「季振宜／蔵書」印が各冊首にある。

残本（存巻一三～三八・四九）計二七巻

〔南宋中期　建安〕刊　一三冊　北京図書館蔵

常熟瞿氏鉄琴銅劍楼旧蔵本で、その宋本書影に巻一三后妃伝上第二葉が掲げられているが、静嘉堂本と同版である。「汪士鍾字春霆号琅圃書画記」ほかの朱印を捺すという。

同じく蔵書目録巻八には、存巻を列伝巻一至巻二十六及巻三十七と示し、褚墨精好といったあとに、汲古閣本との校合の結果を、ほぼ各巻に一例以上、計五四例も挙げている。その冒頭は間有脱字として、后妃の五字と于文忠伝の二四字の誤脱例を指摘するものであるが、以下は汲古本に対してこの誤らざる例で、汲古本より善処が甚だ多いとする。

ここに挙例の箇所を、百衲本および校点本の底本の元大徳信州路儒学刊本と校し、関連する北史の他の箇所、魏書・北斉書・隋書の関連記事と較べて検討してみると、次のようなことがわかる。

まず、汲本非とするうちの二例は、実はこの宋本の方が正しくない。とくに巻二六許彦伝（付許宗之伝）の「太武聞之日」の「太武」は、汲本だけでなく元本等も「文成」としていて、校点本（九四五頁）もこれを採っているが、魏書巻四六の同伝にも「高宗（文成帝）」とあって、宋本がなぜこれを改め、さらに瞿目がそれを支持したか解せない。また、魏書等の同じ記事と較べ、文意を按じても、汲本の方が元本などとともに正しいと考えざるをえない場合が、他に二例はある。

しかし、大半は汲本に勝っていて、それより善本であることは事実である。さらに、校点本は、南史と同じく元本を底本として諸本を参照し、この宋本も査対したとしているが、その校勘記に明記して、元本以下を斥けて宋本を採った場合が、この挙例のうちに二つある。魏書と通志の記事が勘案されている。

そして、はじめの誤脱の例をみると、后妃伝の脱五字は連続でなく、北斉の八十一御女の称のうち第一二の豔婉が抜け、一七・二五・三六の各一字を落したものである。元本は豔婉はあるが、他の三字の箇所は空格である。北斉書后妃伝は早く失われたからこれが唯一の記事であろうが、北史も宋元時代に不明確になっていたものである。

結局、宋本は汲本よりかなり優れていることが明らかであるが、そのほとんどの場合は元本も同様であるから、校合は百衲本・校点本の底本の元本としなければ、本文の善悪を考えるためには意味が乏しいことになる。そこで、静嘉堂本の冒頭の巻二魏本紀について宋本・元本を対比してみると、この巻は宋本が三七葉、元本が三八葉とやや長いせいもあるが、宋本の方に一五字ほども誤字が多い。それも、校点本の校勘記に宋本も含む元本以下の各本の誤りを三〇も訂され、さらにこの校勘記には断って記されていないが、校点本が宋元本を退けて魏書本紀に従っているらしい例が五つはあるうえのことである。一方、宋本が元本より正しい場合が一例だけある。

その他の数巻も校合してみたが、ほぼ同様の結果を得た。南宋中期の建刊本は、三国志などにおいてもそうであったが、明刊の諸本には勝るものの、宋元の官刻本に較べてやはり善本とはいえないようである。

元大徳信州路儒学刊本

元大徳九路儒学刊の北史は、現存本の数も比較的多く、刊刻の地も信州路と明らかである。刊書序の類がないから、年代は

確定できないが、南史の大徳一〇年をそう離れることはあるまい。刊地については、信州路ないしは路内の各儒学・書院の名がほとんど毎葉の版心上象鼻に雕られている。

南北史はとかく同時に扱われることが多いから、版式上そのほか共通するところが少くないが、北史も明南監二十一史の一として万暦まで用いられたから、嘉靖一〇年修本はわが国にもかなり存する。しかも、明初ないしは嘉靖初年までの補修の、原刻の残存の多い本もいくつか存する。

その第一は百衲本の底本の北平図書館旧蔵・台北の中央図書館現蔵の六五巻三二冊である。

残本（存巻一・二・五・六・九～一四・一七～二〇・二三～三二・四一～四九・五六～六四・六八～七一・七四～八三・八六～九〇・九五・九六・九九・一〇〇）〔元大徳〕信州路儒学刊〔元末〕修　三二冊

現在の中央図書館の善本書目では、巻二二（伝一〇）が存し、巻八三（伝七一）がないことになっているが、ほぼ同時代のものであるから当然としても、百衲本の内容は北平図書館善本書目の巻次と合致する。しかも、各一巻の増減であるから存巻の合計が変るはずがないのに、中央目録は六七巻と誤算している[5]し、ここでは北平目録の方を採った。

百衲本によれば、この本は目録はじめ三五巻を欠くようであるが、残巻はほとんど原刻である。わずかに巻二八に趙伯川、巻六一から六四にかけて王 王安 楊茂卿 張克明 という刻工の雕った九葉だけが、元末ごろの補刻と見られる。あるいは、一応は完成したもののごく一部になんらかの欠陥があって雕り直したというような、ごく早い時期のものであるのかも知れない。しかし、元修本であることは認めざるをえない。

ただし、次に述べる静嘉堂本に行われている嘉靖元・二年の補刻はなく、さらに巻六四の静嘉堂本ではおそらく明の弘治正徳ごろの修の傅継之と張清之の葉、同じく巻七九の呂、同じく巻八九・九〇の朱と章良之の葉、計七葉が、この本では原刻の葉である。つまり、明の補修は入っていないといってよい。

このような善本で、欠巻が比較的少いところから、百衲本はこれを主たる底本としたようである。旧京書影に、巻四首半葉(244)、巻四八尾半葉(245)が掲載されている。

旧北平本は中央図書館にはもう一部ある。

残本（存九・一〇・一七・一八・三五・三六・五二～五五・五八～六〇・七八～八五・八八・九一～九三・九五・九六・八六～八八・九一～九三・九五・九六・八三・）存二七巻　一三冊

北平図書館善本書目では、巻二～四もあって二九巻であったが失われたらしく、また逆に巻八三（伝七一）が増えている[6]。両目録とも元刻本・元大徳間信州路儒学刊本としていて、原刻か明初修かであろうが、未調査のため定かでない。

なお、やはり北平図書館旧蔵の

存三六巻（巻二～五・二五・二六・三八～四〇・四七～六一・七八～八五・九四～九七）

は大戦後、所在不明である。

次で、同じく中央図書館蔵本である

一〇〇巻　〔元大徳〕信州路儒学刊

（巻一四～一八補配明初覆刻明修本）　九三冊

同館の金元本図録（図五七）および中国訪書志（斯道文庫論集一三C80）の解題に基いて右のように記したが、以下も両書による。

後補金砂子散し艶出水色表紙（二七・八×一八・四㌢）、襯装。詳細は静嘉堂本の項に譲るが、同本が補写の本文巻首は、「魏本紀第一（隔五格）北史一」と題し、その匡郭は双辺（二一・七×一五・六㌢）。列挙された刻工名の中に南史のところで表示した明初覆刻本の者が一〇余名ほど含まれ、（明修）として付記されているのは覆刻本の補刻刻工である。そして、巻一四～一八に明修の粗黒口の葉が多く、他はほとんど元印であるというから、この五巻が明初の覆刻本、かつその明修本であると思われる。第一〇（一二）函の帙の傅増湘の手書題簽に「此書海源閣旧蔵、庚牛冬購於敝市、頗有残帙、先後訪求原本配斉。王申五月重装記。書潜検畢」とあるといい、雙鑑楼蔵書続記に、楊氏海源閣で九巻を欠き、傅氏のもとで四二巻を欠いていたというから、傅氏の配補がこの五巻にとどまったはずはないが、氏の一〇〇巻完備の努力がむしろ原刻ないしはそれに準ずる善本をもって結実したために、いまはそれ以上に区別しにくくなっているものであろう。(7)

蔵印は「季振宜／蔵書」、「恩福堂／蔵書印」（陰）、「曾経／我眼」（陰）、「楊彦合／読書印」「宋存書室」（陰）「楊氏海／源閣蔵」「可為／知者道」（陰）「秋菘／斎印」「楊紹和」「瀛海／僊班」「海源閣」「楊保彝／蔵本」「晋生／心賞」、「傅印／増湘」（陰）「蔵園」「雙鑑楼／蔵書印」「江安傅／玩叔収／蔵善本」「企麟軒」（陰）「雙鑑楼／珍蔵印」「忠謨／継鑑」（陰）。金元本図録には他に「佩徳斎蔵」（陰）、「傅沅叔蔵書記」「江安傅増湘沅叔珍蔵」「江安傅氏洗心室蔵」「江安傅氏蔵園鑑定書籍之記」「沅叔」「莱娛室」の諸印も捺すという。

北京図書館善本書目には次の二部が著録される。

一〇〇巻　明嘉靖元年重修本　四八冊
一〇〇巻　明修本（巻七～九配明初刻本）　六〇冊

前者は中国版刻図録図三〇四に巻二八の首半葉が掲げられ、嘉靖元年重修本というから、同二年修の静嘉堂本とそう変らないと思われる。同本には五巻弱の欠巻があるものの、同二年の修葉は四一葉と少いが、北京目録がこれを見逃すこともあるまいから、元年の印本なのであろう。

後者は涵芬楼旧蔵で、同燼余書録著録本。さらに蔣香生旧蔵とあるが、版については「稍有欠葉、以別一元本及明補版配」というだけで、北京図書館善本書目の「明修」との関係が明らかではない。ともかく、主体はおそらく嘉靖元年の修補が行われる以前の明修本であること、それに同版のこれもおそらく明修本が配補されていること、そして巻七～九の三冊が明初の覆刻本であること、と推定されるのである。

しかし、百衲本は一〇〇巻中の六五巻に前述の北平本を、残りに自蔵の元大徳本を用いたというから、それはこの本なのであろうが、すこぶる疑点も多い。明初覆刻本は巻七～九にすぎないはずなのに他にも多数、それも粗黒口の補刻葉を大いに含む巻があるし、また逆に巻七・八に元大徳本が六葉づつあり、蔣氏印も見えないからである。二本以上を併用しているとしか思えず、焼失以前の本を用いている場合もあろうが、百衲本の

項に詳述することにする。

一〇〇巻　〔元大德〕信州路儒学刊〔元〕～明嘉靖二年遞修
（巻一〇前半・第二七・二八葉、巻一一・一二（明末補写）目録、巻一・二・九一～九三清補写）

四九冊　静嘉堂文庫蔵

後補香色表紙（二八・五×一八・八チセン）、襯装（料紙高さ二六・一チセン）。第一冊、北史目録と巻一・二は清代の補写で、無界一〇行二二字、原本と行格を合わせてある。巻三の首題は「魏本紀第三（隔五格）北史三」。四周双辺（二一・八×一五・四チセン）、一〇行、二二字。版心は線黒口、上象鼻の右に「信州路儒学」等、刊行の路学・書院名、左に字数を刻した葉が主で、これは後に詳記する。題は「北史帝紀三上」のようで、「上」を付けたものが多いが、百衲本はこの「上」をほとんど消している。双魚尾。下象鼻に刻工名、ある巻末に版下の書手の名が記される。巻末、尾題の後に校正者の氏名を記す巻があり、巻次、すなわち担当の路学・書院によっていささか相違するが、これも後に記す。

巻一〇（一部）～一二の補写は有界一〇行、二二字の罫紙にされ、明末ごろの筆と思われる。巻九一～九三のそれは、目録・首二巻とともに、無界であるが同じ行格で、清代の後半に降るものであろう。

補刻は、前述の北平本のところで触れたが、元末ごろのものが九葉、明の弘治正德ごろのものが七葉とごくわずかあり、さらに嘉靖元年、同二年の補刻年記がときに見受けられる。補写の約一〇巻を計算外にするが、元年のものが約一一〇葉、二年が約三〇葉を数える。南雍志経籍考に嘉靖一〇年前後のこの本の版木の数を存者二六七六面、欠者四五面というのからみれば、きわめてわずかにしかすぎず、大半が原刻葉である。欠葉が三八葉あり、このほとんどが後修本では嘉靖九・一〇年の補刻に代るが、つまりはこれは南雍志の欠者なのであろう。嘉靖九・一〇年の大補修は、ここではさほど漫漶とも思えぬものにも及んでいるが、残った原刻葉も版心の儒学・書院名と刻工名の多くを削ってしまい、各儒学・書院の別、刻工名に冠する泗州・金川・古杭・康山・旰江の地名がほとんどわからなくなるから、この本のような大補修以前の印本の存在は貴重である。

それらはほぼ巻次順にグループをなして異るので、それに従って表に似た形で次に掲げる。上段に儒学・書院名、下段に刻工名、巻末に版下抄手と校正者名がある場合は、それをその所在巻次（算用数字）とともにその後に、そして補刻刻工名は最後に列挙した。

巻一～五〇

信州路学	信路学刊	一宗	丁和甫	子中	子忠	子名	
信州路学刊	信路学	子明	子伸	文章	艾伯大	朽木	
信州路学刀	路学刊	江士堅	土堅	江子珍	江祖珍		
信州路刊	信州儒学	祖珍	江益山	益山	江義甫	義甫	
信州路儒学刊	路学	江興甫	興甫	何南	何南卿	玉甫	
信州路儒学刊造		呉友山	友山	呉方午	方午		
信州儒学刊	信州学	呉明甫	明甫	呉祖	祖		

信州学刊　信州学刀　余子真　子真　余志道　余道　志道
信州学内刊　信学刀　周広　倪学　連君礼　君礼　陳仁玉
信州府学刊　信学刊　仁玉　洒州楊魁伯　洒州楊魁　魁伯
信学刊　信学　府学　徳昌　賴元甫　元甫　応子公　子公
州学刊　本学刊　府　丁　山　中　公　王　午　木　占
州学　州学刀　州刊　田　可　升　丑　吉　尹　朽　江
本学刊　学刊　伯　君　秀　昌　明　何　周　忠
葛書　巻32 37 45　珍　和　艾　倪　甫　真　南　益
諸葛詠書　巻13 14 28 29 30 31　徐　童　興　潘　虞　道
方洽　周益　周巳干　孫粋然　校正　巻3 4 6 7 9
周巳干　孫粋然　校正　巻6　周益　校正　巻8
方洽　周益　校正　巻10 16 17 20
方洽　周益　周之冕　孫粋然　校正　巻13 14 15 21 23 26～29 31 33～35 37 42～45 47 48 49
周之冕　孫粋然　校正　巻19 22 24 25 30 32 36 41
方洽　周益　周之冕　陳莘　校正　巻38 39 40

巻五一～六七

信州路象山書院刊　子仲　仁可　金川王水寿　金川王水
信州象山書院刊　金川王　金川永寿　王永　用明　均夕
信州象山刊　呉以敬　以敬　金川周元信　金周元信
信州象山　象山刊　元信　肝江李仲　李仲　古杭張用可
信象山刊　信象山　古杭張用　古杭用可　康山張可久
象山書院刊　象山　可久　可宗久　可宗　英可　肝黄仲立
山　父　元　正　肝江黄仲立　肝江仲立　肝仲立　于仲
可　立　志　杰　仲立　肝江黄君用　黄均用　均用
常　寄　儒　祥仲　斉吉　徳父　徳甫　徳懋　儒夫

巻六八～七二

信州路稼軒書院刊　徐仲　清甫　震升
信州路稼軒書院　稼軒書院　升　立　徐　清　添　興
信州稼軒書院　稼軒書院刊

巻七三～七九

藍山書院刊　藍山刊　子進　用明　二　子　呂　可　用
先　伯　池　希　三

巻八〇～八三

信州路道一書院刊　文章　可臣　受山張　王氏刊　山　中
道一書院刊　道一　文　田　臣　甫　張　敏　翁　雷　震
道一書院　道一刊　旨　冒
楊燧　校正　巻80　聶則遷　校正　巻81　陳志仁　校正　巻83

巻八四～九〇

玉山県学刊　玉山学刊　弓　王　占
玉山儒学刊　玉学刊
鄭道寧　王烈　校正　巻84～90

巻九一～九三（補写）（百衲本による）

永豊儒学刊　永　立　辛　沂　明　興
永豊学刊　永豊刊

巻九四～九六

戈陽県学刊　戈陽県学　希敬　連生　李三　生　用
戈陽学刊　戈陽学　戈学刀　可　志　希

巻九七・九八
上饒県学刊　八士　子厚　子進　元中　元仲　彦卿
上饒県刊　顔卿　子厚　梁
巻九九・一〇〇
貴溪県学刊　貴溪学刊　希敬　仁　希　保　鄭　葵
貴溪学刀　貴県学刀
〔元末〕補刻　趙伯川　王　王安　楊茂卿　張克明
〔明弘治正徳〕補刻　張清之　傅継之　呂　朱　章良之
明嘉靖元年補刻　仇選　史梦祥　何応福　李逢太　沈之翰
胡易　徐正叙　徐正　曹珮　曹継芳　張子曜
張祥龍　舒芳　傑　熊綸　刘慶傑　熊守易

これによって、まず、信州路儒学が北史の刊刻を担当して、その半分の五〇巻を自ら受持ち、残りを管内の五県学と主な四書院に分担させて、これを行ったことがわかる。

五県学の名は大明一統志巻五一広信府の条に見え、康熙・同治の広信府志や各県志にも、創始の歳月紀すところなしという玉山も含めて、いずれも宋代の創建にかかるが、玉山県学の七巻、戈陽・永豊県学が各三巻、上饒・貴溪県学が各二巻と引受けた巻数は少く、それも一〇〇巻中の末二〇巻である。

一方、書院は象山が一七巻、藍山が七巻、稼軒が五巻、道一が四巻である。明清時代にも象山書院と道一書院が貴溪県に、稼軒書院が鉛山県に、藍山書院が戈陽県に存続し、大明一統志はじめ近世の各県志に道一書院を除いてその名が見え、道一書院も康熙二二年序刊の広信府志（二〇巻　清高駿升等撰）には記載されている。ただ稼軒書院の鉛山県は、元代には州として独立していて信州路には属さなかったはずで（元史六二地理志）、広信府志や康熙二二年序刊の鉛山県志（八巻　清潘士瑞等撰）の沿革の記事も同様であるが、北史の版心には少からず信州路稼軒書院と明記されている。一統志以下は鉛山県城の東郊にこの書院があるとし、鉛山県志の地図にも書院の位置が示されているが、鉛山が距離的には戈陽や貴溪よりも上饒に近いにしても、この辺の事情はいまは解せない。

いずれにせよ路儒学、四書院、五県学が一書の刊刻を分担したのであるが、校正、さらには版下を書くところまでは当然それぞれに行ったであろうが、刻工も共通するらしい人物はごく少い。それだけで雕版まで各地で分業したとは必ずしもいえないが、かなり短時日のうちにされたためではあろう。

ところで刻工名に冠する地名らしいものであるが、信州路学担当分に洒州または洲州、貴溪県の象山書院担当分に金川、肝江、そして同県の道一書院との双方に康山がある。このうち、康山は信州路に北接する饒州路の楽平県にあり（饒州府志四〇巻　清王用佐等撰　康熙二三年序刊）、金川は別に饒州路刊の隋書の刻工にもおり、江南浙西道肅政廉訪の司管内、つまり現在の浙江省になるが、玉山県からその境界の山を越えた近くの、衢州路常山県の西北部にあり（衢州府志一六巻　明葉秉敬等撰　天啓三年序刊　常山県志六八巻　清李瑞鍾等撰　光緒一二年序刊）、肝江は江西湖東道に入るが信州路に近接する建昌路の南城附近を鄱陽湖に向けて流れる（南城県志一二巻　清曹養恒等撰　康熙一九年序刊）。やはり隋書に昌江程道鎮という刻工

がいるが、昌江は隋書の饒州路内の浮梁、景徳鎮の西を流れてやはり鄱陽湖に注ぐ（饒州府志）。すなわち、これらの地名はいずれも山川であるが、刊行地に近いかなり狭い範囲に限られている。洒水、古杭とみえる地名もほぼ同様かと思われるから、光緒の版であるが江西・安徽・浙江通志の類を探してもわからない。ただ、古杭は南史の刻工にもいたが、あるいは古坑かと考えれば、安徽通志巻一二山川の徽州府の条に古坑水があり、「古坑水、婺源県東、源出平障山、後繞南麓、西合済溪水、注鱅溪」というのに当ろうか（婺源県志 一二巻 清蔣燦等撰 康熙三二年序刊本 巻二に古坑磯水の条がある）。婺源州は当時は徽州路に属したが、ほぼ受山、昌江、金川の中間に位置し、信州路の真北になる。これら三通志、また村名までを大量に録する浙江全省輿図並水陸道里記（清宗源瀚等撰 民国徐則恂等修訂 民国四年刊）を通覧して行くと、杭のつく地名は稀であるのに、内陸部の地形によるのであろうが、下に坑を称するものは多数あり、とくに現在の三省の境に近い地方、つまり判明した四箇所と同じく信州路の周辺に珍しくないからであるが、古坑はあくまで推測である。もう一つの洒州ないし泗州というのは見当らず、泗水が太湖から呉淞江に流れる江蘇松江府は、遠隔にすぎるというより、水田地域で彫版刻工の集合居住地として適するとは思えない。泗州と読めば、まず安徽のほぼ西北端にあるのは（現泗県）（泗州志 一八巻 莫之翰等撰 康熙二七年序刊）長江よりかなり北方で遠すぎ、当時は嶺北湖南道の醴陵州治下であったであろう湖南省醴陵県の西南端、湘水西岸の泗州（増修醴陵県志 一五巻 清黄祖文等撰 乾隆九年序刊）は江西との境に近いから地理的にはさほどではないが、まず泗と読むことにかなり無理がある。

ともかくこれらの地は現在の江西省西北部およびその周辺に集中するが、金川が浙江省の西端であるように浙江に隣接し、さらに西南は福建省に接して、建陽も上饒・鉛山から一〇〇キロ余の距離にある。元代にはこの地方も、杭州、建安に次ぐ刻書の地であったのではないか。

元九路儒学十史は、正確とはいえない面もあるが一応の目安として、南雍志経籍志に集慶路儒学梓とある一〇史の版木数を合計すると、存欠ともで実に二三、二九三面になる。これが大徳九年からわずか一、二年の間に相次いで刊刻されたのであるから、江南の刻工は徹底して動員されたであろうし、その際、地元に刻工を雍する地方はなるべくそれでまかなおうとするのが実情というべきであろう。古杭を婺源の古坑水に定めるつもりはないが、これらの地域は江西北部を中心とした一帯と考えるべきで、これがさらに大きくは江浙の雕版の一圏内に入ることになろうが、古杭という一地域を直ちに杭州に結びつけるのは妥当とは思わない。(註)

以上の明嘉靖二年修までの本は原刻を多く残すが、明南京国子監では嘉靖八～一〇年に、二十一史を整備して印行することになったらしくて、これに大改修を行って、以後、原刻はかなり姿を消し、残ったものも版心の儒学・書院名や刻工名を削られてしまった。しかし、二十一史の一としてしばしば印刷されたようで、万暦一六年から万暦版の北史に代るまで、半世紀の

間の印本が次のように現存する。

〔元大徳〕刊〔元末・明初〕・嘉靖九・一〇・一二年遞修

一〇〇巻　（平泉鄭氏・寛永寺勧学寮旧蔵）三〇冊　内閣文庫

〃　（林家旧蔵）三〇冊　〃

〃　三〇冊　書陵部

残本（欠巻六～九・五七～六一）　二八冊　蓬左文庫

一〇〇巻　三二冊　天理図書館

残本（欠巻三五・三九～四三・八二・八三）二五冊　東洋文庫

零本（存巻一六・五七～五九・七三・七四）　一冊　〃

残本（存巻三～五・一七～四八・八三～一〇〇）一六冊

（楊氏観海堂旧蔵）　故宮博物院

一〇〇巻　（劉氏嘉業堂旧蔵）　三〇冊　中央図書館

〃　六四冊　〃

台北の中央図書館の二部については、同館の金元本図録と中国訪書志による。なお、上海図書館に元刻本（同館善本書目）、南京図書館に元大徳信州路刊本三〇冊（丁氏善本書室蔵書志・江蘇省立国学図書館図書総目等）、北京大学図書館に明嘉靖修本本が三〇巻と存巻二八～五〇・五四の八冊（北京大学図書館蔵李氏書目）があるという。

これらのうち、内閣文庫の平泉鄭氏・寛永寺勧学寮旧蔵本は嘉靖の中ごろ、書陵部本がこれに次いでその末か隆慶ごろの印本であり、内閣文庫の林家旧蔵本や蓬左文庫本は後印で、万暦一〇年代に降る。南史と同様に、いずれも南監二十一史の一として現存するために、ほぼ印行年代が推定できるもので、その根拠については前稿に詳述しておいた。

ただ、補刻年記はみな同じで、嘉靖九・一〇年が主で稀に一二年のものがある。この時の補修は二十一史全体にわたって大規模なものであったが、北史はすでに嘉靖元・二年にけっして多くはないが一通り行われていたせいか、この前回に較べて量的にかなり少い。しかし、版心上下象鼻の路儒学・県学・書院名と刻工名の大半は削り落され、その残るものは稀である。信州路儒学の名はわずかに見られるものの、県学・書院の担当についてはもはやわからない。刻工名も、呉友山　呉祖高　英可用　何南　子　伯　士　堅　山　などがごく散在するばかりである。校正者の姓名もほとんど失われて、巻二一・三三・九〇のものがある程度であり、それも後印本では、巻三三の四名のうち首の二人が落ちている。ただし、原刻の本文にはさほど手が加えられていないらしい。

明初覆元大徳信州路儒学刊本

南史と同じく、九路儒学刊本の明初ごろの覆刻本が北史にもある。

残本（存巻一～一二・一七～二九・三一・三二～三六～四〇・六一～九七）存六九巻

〔明初〕覆〔元大徳〕信州路刊　同〔明〕修

二六冊　中央図書館（北平）蔵

後補藍色表紙（二六・八×一八・三センチ）、

A第一～六（巻一～一二）・一一（巻三一・三二）・一四（巻六一～六三）冊　原刻本　金譲王装（料紙高さ二四・二センチ）

B 第七・一〇・一二・一三・一五～二六冊　原刻本　襯装
「晋府／書画／之印」「敬徳／堂図／書印」
C 第七・八（巻二〇～二七）冊　補刻本　襯装
の同版三種の取合本である。

首に北史目録、本文巻首は「魏本紀第一（隔三格半）北史一」と題す。左右双辺（二二・二チセン×一五・六チセン）、一〇行二二字。版心は原刻は線黒口、「北史帝紀一上」のように題し、その下方に丁付、下象鼻に刻工名。補刻は粗黒口で、題は列伝だがほぼ同様、刻工名はごく稀に粗黒口の中に陰刻された場合があるだけである。信州路儒学等の儒学・書院名はまったくなく、刻工も元信州路刊本とは異るが、巻末の周已千・孫粋然・方洽・周益・周之冕・楊燧・鄭道寧・王烈ら校正者の氏名は、その配置もほぼ同様である。刻工名は、南史のところに掲げた表と重複するきらいがあるが、今後の利用にはこの方が便利なので、南史以下、ほぼ共通する八書の刻工名を一覧表にして示す。南史は百納本から採録したが、その底本とされたのは台北の中央図書館現蔵の北平本の存四四巻六冊の大半らしく、他は南史のところ（二〇三頁）で掲げた a～g の七書である。[8]

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	古日抄分類	文粋
子中[3]	○		○	○	○	○	○	○
子名						○		
子享							○	
子旻	○		○	○	○			
子記	○					○		
子高	○	○		○	○	○		
士通	○	○	○	○	○	○		
士達	○	○	○	○	○	○		
中豪[4]		○						
六付		○	○	○	○	○		
六彦	○	○	○		○	○		
六晏	○	○	○	○	○	○		

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	古日抄分類	文粋
友永茂	○	○	○	○	○	○	○	○
双平	○							
月寿						○		
王以善	○		○	○	○			
王保			○	○	○	○		
王貴全						○		
丘[5]老	○	○	○	○		○		
付名仲	○	○	○	○	○	○		
付彦成	○	○		○	○	○		
付彦和							○	
付資	○	○	○		○	○		
永茂					○	○		

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	古日抄分類	文粋
玄保					○	○		○
玄宝								○
名仲[6]	○				○			
名遠	○							
朱宗文	○	○						
朱彦								○
朱堯		○						○
江子名	○	○	○					○
江六	○	○						○
江同	○	○			○	○		○
江后	○	○	○		○	○		○
江屋					○	○		○

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粋
江貴全	○							
江童							○	
汝敬	○	○	○			○	○	○
7 伯安	○	○						
伯美	○	○	○	○		○	○	○
仏林	○	○						
余子真		○						
余長						○	○	
余長寿	○	○	○	○		○	○	○
呉中		○	○		○	○	○	○
呉原礼	○	○		○	○		○	
呉祐							○	
呉福	○	○	○	○		○	○	○
肖寄	○	○	○	○	○	○	○	○
志道	○	○	○	○	○		○	○
沈彦						○		
辛豪							○	○
8 侍者	○							
周同	○	○					○	
周童							○	
周寿	○	○	○		○		○	○

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粋
孟和			○				○	○
孟淳	○	○	○	○	○		○	○
孟達	○							
孟竜	○						○	○
孟隆								○
宗文	○	○	○	○	○	○	○	○
易林	○							
林安	○	○	○	○	○	○	○	○
林備	○							
和尚			○	○			○	○
長寿			○			○		○
具福							○	
9 姜原良	○	○						
彦正	○	○	○		○	○	○	○
彦成			○	○			○	○
彦良		○						○
彦和	○	○	○	○	○	○	○	
彦珍	○							
彦従	○		○					
彦博							○	
范子通			○					

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粋
范双評	○							
范彦	○					○		
范彦成	○							
范彦従		○	○		○		○	○
范通	○		○	○	○		○	○
貞彦						○		
原良	○	○	○		○	○	○	○
原礼	○	○	○	○			○	○
10 原文	○							
徐子中	○	○	○					○
徐子仲				○	○			
徐子達							○	
徐田				○	○	○	○	○
徐林	○							
徐彦正	○							
兼雨						○		
11 張名	○							
張名遠	○	○	○	○	○		○	○
張伯	○							
得子中		○						
章毫	○	○		○	○			

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粹
章豪		○						○
連彦	○	○	○				○	○
連彦博	○	○		○				
郭名	○	○						
陳士達	○	○		○	○			○
陳士立								
陳仕達				○				
陳四	○		○					
陳立	○							
陳后	○	○	○	○				○
陳垕	○						○	○
陳和	○				○			
陳彦	○						○	
陳彦正								○
陳彦和	○		○				○	○
陳彦博	○	○						
陳厚		○	○	○	○		○	○
陳劉其								○
陳魯	○	○	○		○		○	○
陸付	○	○			○			
12 媿右	○	○	○		○			○

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粹
媿名	○	○		○			○	○
媿伯美	○	○		○	○			○
媿海	○	○		○				
堯朱	○	○	○	○		○	○	○
游子名			○				○	
游名			○				○	
景中	○	○	○	○	○		○	○
景舟	○	○	○		○	○	○	○
番刘					○	○		○
貴全	○	○	○		○	○	○	○
黄子名	○	○		○	○		○	
黄子晏	○	○	○	○		○	○	○
黄子明		○				○	○	○
黄子高	○	○		○	○			○
黄志道	○	○			○			
黄侍	○	○			○			
黄明実		○						
黄孟竜	○	○		○				○
黄晏				○				
黄保	○	○	○				○	○
黄彦								○

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粹
黄是			○				○	○
黄軒	○	○	○					
黄喧					○		○	○
13 楊保					○			
葉禾	○		○					
葉松	○	○		○	○			○
葉寿			○	○	○	○	○	○
虞子記	○	○	○	○	○		○	○
虞子得			○				○	○
虞子德	○	○		○	○			○
虞子璋	○							
虞天孟								○
虞付記								○
虞向	○							
虞后	○	○	○			○	○	
虞良	○							
虞亮	○	○	○	○	○	○	○	○
虞孟和	○	○						○
虞孟淳	○	○			○		○	○
虞孟德	○							
虞厚			○	○	○		○	○

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粋
虞益							○	
詹見					○			
詹現	○	○		○	○	○	○	
詹塊							○	
14 熊仏林	○	○						
熊汝敬	○	○	○					○
15 劉八	○	○		○	○			
劉本	○	○	○		○	○	○	
劉伏	○	○	○		○	○	○	
劉伏三					○			

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粋
劉伯安	○		○				○	
劉宗	○	○					○	
劉保	○	○	○	○	○	○	○	
劉宣	○	○	○	○	○	○	○	
劉侍							○	
劉侍者	○	○	○	○	○	○	○	
劉是者					○			
劉毘							○	
劉景中				○				○
劉景忠				○				

	南史	北史	遼史	金史	古史	古今紀要	日抄分類	文粋
劉復						○		
劉復三					○			
劉貫	○	○		○	○	○	○	
劉詹							○	
潘刘			○			○		
潘晋	○	○	○	○	○	○	○	
蔣仏	○	○		○	○		○	
16 薛和尚	○	○		○	○	○	○	
17 羅六	○	○		○	○	○	○	
羅雄	○	○						

Cの補刻本は原刻葉が二割ほどでかなり痛んでおり、福建の刊刻で、版木の材質が軟かかったのか、大半が粗黒口の補刻葉に代っている。これは字様も劣り、墨釘の箇所がやや目立ち、明修もやや降ってからのものであろう。その刻工は、呉陶　林九　游元寿　鄭文寿、他に百衲本から、呉員　何二　何好二　余延宗　余宗　游林九　清遠　を補うことができる。

北平本にはもう一部、やはり中央図書館現蔵の

残本（欠巻二三～二四・二九・三〇・三四・六〇・七九・八〇）存九一巻　三〇冊

があり、北京図書館善本書目にも左の三部が著録されている。

一〇〇巻（欠葉配元大徳信州路儒学刊本巻六・七・二七・三三配清鈔本）　七六冊

残本（存巻一～七・一〇～一二・一九・四三～五三・五五～六六・八六・八七・九二・九四・九八～一〇〇）存四一巻　三四冊

残本（存巻一～二一）存二一巻　一〇冊

一は劉氏嘉業堂、二は郁泰峯、三は王献臣の旧蔵本で、後二者は上海涵芬楼を経たからその燼余書録に著録される。二は完本であったらしいが、張元済が第一函を取出して校閲中に被災し、余の三函は涵芬楼で灰燼に帰したという。

そこでも触れられているが、行款が合致し校正人名も減ってはいるが特に変化していないから、やはり元大徳信州路儒学刊本の覆刻と見て誤りなかろう。ただし、南雍志経籍考に集慶路

儒学梓とあるのは原本の方で、覆刻本の方が明代以後、これらの数部を残しただけで姿を消した。

百衲本

百衲本二十四史の北史は、まず元大徳信州路儒学刊本の善本の北平本六五巻に拠り、その欠巻を涵芬楼蔵の同至明修本と明初覆刻本とで補充したようである。しかし、前者のうちにも欠葉が少くなかったからであろうが、巻五九には明初覆刻本が六葉も混る。さらにその欠巻部分に至っては、それぞれの一巻中に信州路刊本とその覆刻本との双方が入乱れていて、しかも後者の過半は粗黒口の補刻葉である。ここに原刊本と覆刻本、原刊本の補刻本と覆刻本の補刻本の、いずれもが不完全の場合に、テキストとしてどれを採り、どう組合せるかの問題があるが、それを見るためにあえて冗長を厭わずこの三五巻の各本による構成を表示する。

	信州路刊本 原刻	信州路刊本 補刻	明初覆刻本 原刻	明初覆刻本 補刻	
目録 全31葉	4葉		2葉	15葉	信州路刊の北平本の存否は不明
巻3 紀3	32	4	1	27	
4 4	21	4	6	11	
7 7	30	7	5	21	
8 8	22	8	6	9	
15 伝3	34	16	6	20	
16 4	30	16	1	13	
21 9	31	17	2	13	
巻22 伝10	全25葉	17葉	0葉	8葉	
33 21	40	14	2	24	×
34 22	30	8	0	22	×
35 23	30	28	2	0	×
36 24	23	20	3	0	×
37 25	19	19			×
38 26	32	32			×
39 27	24	22	2	0	×
40 28	37	28	5	4	×
50 38	21	15	5	1	
51 伝39	25	16	2	7	
52 40	19	7	1	11	
53 41	31	26	0	5	
54 42	31	14	0	17	×
55 43	35	22	2	11	
59 47	20	14	3	3	信州路刊の北平本は存
65 53	15	13	0	2	
66 54	20	12	0	8	
67 55	15	12	0	3	
72 60	21	21			×
73 伝61	24	23	0	1	×
84 72	14	9	0	5	×
85 73	21	20	1	0	×
		弘治正徳ころ修1			

巻	伝	全	信州路刊本 原刻	信州路刊本 補刻	明初覆刻本 原刻	明初覆刻本 補刻
91	79	21葉	3葉	元末修1	0葉	18葉 ×
92	80	39	18		0	21
93	81	38	26		0	12 ×
94	82	30	26	元末修2	2	2
97	85	30	24		1	5 ×
98	86	30	17		2	11

最下段に×印を付けた巻は、涵芬楼の明初覆刻本の完本のうち焼失した巻二二以下で、かつ存四一巻のもう一本も欠巻のところであるが、巻三三・三四・五四・九一のようにそれがとりわけ多い場合をはじめ、その一五巻にもわたって覆刻本が含まれている。とくに全葉補刻の巻三四は北平本にもなく、これは、現存二一巻本が一九三二年に被災する以前にすでに撮影・影印されていたものであろうか。

本文については、雙鑑楼蔵書続記や張氏の諸書誌の校勘を承けて、南宋建刊本の項で元大徳信州路刊本がもっとも優れていることを明らかにしておいたが、近年の校点本も大徳本と称してこの補刻葉の多い覆刻本をかなり含んだ百衲本を底本とする。いまのところ覆刻本とその補刻にさして欠点を見出せずにいるが、原本の大徳本の原刻が現存すればそれが最良であることはいうまでもない。それにもかかわらず、この表の中でも巻六五・六七・九四のように大徳信州路本と主体にしている巻がある反面、こうまでして覆刻本のそれも補刻葉を用いたことについて、百衲本の編集方法には甚しい疑問を抱いている。

これを見てまず気付くのは、原刊の信州路本が大半を占める巻三五～三九・六五・六七・七二・七三・八五・九四の諸巻は、おそらく欠葉のところに覆刻本を補ったらしいことである。そのすべてではないが、静嘉堂本ではその葉が嘉靖一・二年の補刻葉になっている場合がある。しかし、覆刻本が過半に及ぶ巻は、信州路本に後の嘉靖一〇年修本にしてもそれほど原刻葉がないわけでなく、それが存するところにも覆刻本をもって差しかえているものである。とくに巻三のようにそれが三二葉中の二八葉にもなるのは極端であるうえに、その二七葉までが粗黒口の覆刻本のさらに補刻葉である。しかし、いま嘉靖九・一〇年の修本を見ても、静嘉堂本にあった嘉靖元年の補刻が三葉あるだけで（補刻年記は削られている）、他はすべて原刻であり、漫漶もさほどではない。なぜ原本原刻をそれほどまでに棄てたのか、原本補刻より覆刻本補刻の方が優れているのか、それならそれでなぜ覆刻本で統一しないのか、など理解に苦しむところが多い。

註

金文京氏の教示によれば、元の雑劇に古杭の名を冠したものが少くない。古本雑劇叢刊四集之一の元刊雑劇三十種（北京図書館蔵本の影印　商務印書館　一九五八年）に拾うと、古杭新刊的本関大王単刀会（関漢卿）、古杭新刊的本尉遲恭三奪塑（尚仲賢）、古杭新刊的本関目風月紫雲庭（石君宝）、

古杭新刊関目的本李太白貶夜郎（王伯成）、古杭新刊関目霍光鬼諫（楊梓）、古杭新刊関目輔成王周公摂政（鄭光祖）、古杭新刊小張屠焚児救母（無名氏）の七種をも数える。一方、そこには、大都新編とつくのが三、大都新刊が一篇ある。また、録鬼簿の至順元年の自序に、「古汴鍾嗣成（継先）序」という。すなわち、これらは前代の旧都の古汴・古杭と当代の大都であって、古杭が杭州を指すことは明らかである。

さらに氏によったのであるが、張国淦の中国古方志考の浙江省の府県志類に、

古杭志　佚　薄圻張氏大典輯本

大典輯本拠大典宋文姓剰語下輯本（大仏頭）、引古杭志一条。

がある。この輯本は未見で、一条の内容がわからないが、張氏にして杭州と断定できる記事なのであろう。

附　注

この稿の校正中に、未見のまま取上げていた中央図書館蔵本を、台北に赴いて閲覧調査する機会を得た。その成果は少くなく、（下）冒頭に補遺として詳述したいと思うが、いまこの余白を利用して、注の形で最少限、本文の誤りを訂しておく。

（1）二行目「擱」の原文は「閣」であった。二〇二頁上段末行から下段にかけての記事も、訂正を要する。

（2）巻七一～七三・七八第七葉～八〇の約六巻が金譲玉装の公牘紙本で、つまり襯装の本との寄せ本であり、紙背は正徳一三～一六年に浙江杭州・紹興・衢州府から南京の諸衛倉へ粮米を送ったときの記録であるらしい。したがってこの六巻が〔明中期〕印であり、他の七四巻余もほぼ同期、遡っても前期の印で、ともに〔元末明初〕修本とみられる。

（3）5 の存二六巻一〇冊は薄赤紫色表紙（三〇・四×一五・七セン チ）（一部新補）、「南史」の〔明〕印題簽、粘葉装。他はすべて原刻であるが、わずかに巻五第二六葉と巻七第一八葉に明初ごろの補刻があり、〔元末明初〕修である。6 の存一七巻七冊も、5 とほぼ同じ時期の印本だから、原刻本とはいいがたく、〔元末明初〕修としておく。

（4）7 8 ともにこの原刻本で、上表のほかに四〇に近い刻工名を採録したが、この表には挿入する余地がない。

（5）これは北平目録が正しい。中央目録には誤記があるうえ現在、次掲の一三冊本と一冊づつ、互いに誤って入れ代えて架蔵している。すなわち、三二冊本の巻八三が一三冊の中に、一三冊本の巻二～四が三二冊の方に移り、双方に一冊ずつまったく装訂の異る本を混えるのである。

（6）（5）に述べたようにこの巻二～四が現存し、巻八三を三二冊の中に含めると、存二九巻でよい。百納本の伝六七第四葉「藍山書院」とある葉が〔明初〕修に代っている。

（7）この本は複雑で、右解題に誤りもあり、別に詳述する。

（8）北平本については、南史の二、北史の一本も調査できたから、その中に新たに出た刻工で、名前がすでに列挙されている者はこの表に追加記入した。未採録、つまり他書にもない刻工に、十五 郭名遠 黄于 黄竜 劉子和らがいる。